

学校全体で取り組む、
効果的なICT活用

鹿野利春

(京都精華大学教授)

小中学校では、GIGAスクール構想の進展により、1人1台の情報端末が整備された。多くの高等学校では1年生から順番に自治体によって、あるいは保護者が購入することによって1人1台の情報端末が整備されつつある。

現在は、端末の整備の段階は過ぎ、活用の段階に入っているといつてよい。本稿では1人1台の情報端末を含むICT機器をどのように活用すればよいかについて考えてみたい。

学びの設計

新しい学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が

図 目的別の学習活動



重視されている。この「学び」の主役は生徒であり、その目的は各教科等における資質・能力の獲得などである。ICT活用は、そのための手段に過ぎず、1人1台の情報端末は文具と同様のツールである。

大切なことは「学び」の目的をはっきりさせることと、それを達成するための過程を設計することである。その中で必要に応じて行われるのが「ICT活用」である。

目的別のICT活用を左の図に示す。主体的な学びのため

には、児童生徒の興味・関心を高める必要があり、そのためには大型提示装置や実物投影機が役に立つ。対話的な学びのために遠隔地の児童生徒と交流したり、外部人材を活用したり、生徒どうしの学び合いを活発

表 ICT活用の発達段階

	学習活動	ICTを含む環境	実際の例	発展
導入時	・教材の配布・回収 ・動画の視聴	・基本的なもの ・多様な動画教材	・生徒宛てに資料ファイルを送信する ・宿題を撮影して先生宛てに送信 ・著名講師の授業	・Webを介した教材との連携 ・宿題にコメントと発展課題を付けて返却 ・AIによる自動採点
初期	・意見交換 ・協働	・メッセージ交換 ・ファイル交換 ・協働編集	・生徒の考え方、解決方法を共有 ・賛成、反対などの人数を瞬時にグラフ化 ・1つのファイルを協働で編集	・共有したものをベースに考えを深める ・賛成、反対の意見を踏まえた話し合い ・大学や外部の方との協働作業
中期	・思考力 ・判断力 ・表現力	・統計処理ソフト ・シミュレーション ・プログラミング環境	・教科と身近な問題を結び付けた問題の発見と解決の設定	・統計などを用いた客観的判断や、答えの無い問題に対する納得解の共有
後期	・創造性 ・共創	・表現ツール ・プログラミング環境 ・発表用Webサイト	・クリエイティビティを発揮する場面や発表の場の設定	・大学や研究機関と連携した高度な学習環境 ・実際の社会問題の解決に向けた活動

にすることも有効である。深い学びのためには、個別最適な学びと、図の下の方にあるような協働的な学びを往還することが必要である。

これからの教師に必要なのは、1人1台の情報端末を含むICT機器の活用を前提とした「学びの設計」を行うことである。ここで「学び」としたのは、児童生徒の「学び」は授

業の枠の中だけには収まらないと考えるからである。授業と授業の間の家庭学習や日常生活の中にも「学び」はある。それができる環境を準備したり、「学び」を意識して行わせたりすることも大切である。

進化するICT活用

多くの学校のICT活用は導入時、あるいは初期の段階と思われる。次の段階の活用を意識することにより、ICT機器の先を見据えた導入も可能になり、研修の目的もはっきりする。職員全体でICT活用を進化させていき、より良い学びにつなげていくことが必要である。そのためには、自分たちの学校は、上の表の発達段階のどの辺りにいるのか、次は何を目指していけばよいのかを知ることが必要である。このようなものを学校ごとに作成し、教職員全体で共有することにより、それが可能になるのではないだろうか。

ICT機器は文房具のようなツールであるが活用を深めることで学びは深化する。また、個別最適な学びには欠かせないものであり、評価情報の収集にも大きな役割を果たす。情報社会の進展が我々の生活を豊かにしたのと同じように、これからの授業においては、ICT機器を活用することにより、その内容を豊かにすることが可能である。

できることから始めて、先を見据えて学校全体で進化するICT活用を目指してほしい。その際、教育データの収集、データに基づく指導にも留意していただければ幸いである。

(一社) ICT CONNECT 21 ―― 「教育の情報化」に関係する皆さまにオープンな場を提供し、コネクトすることで教育を良くしていく団体。教育とICTについての情報を毎週メルマガで配信中!

